

飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和3年8月25日現在

今月の重点活動

■農福連携 トマトの箱詰め等を行う福祉事業所を訪問

8月4日、農福連携の取組みをしている高山市三福寺町の福祉事業所「きららハウス」へ、飛騨県事務所福祉課の農福連携担当者と共に訪問し、農業と福祉のお互いのニーズの情報交換を行った。

きららハウスでは令和2年度より、農家団体「THAT」のトマトの箱詰め作業等を受託している。今年度も引き続き作業受委託の取組みを行うとのことで、初日の作業の様子を視察した。約1年ぶりの作業ではあったが、トマトの仕分けや箱詰めをスムーズに行っていた。その他の作業も含め、10月末まで作業が継続される予定である。

なお、「THAT」は若手生産者を中心とした団体で、トマトやパプリカ、桃等を栽培し、共同で出荷している。

農業普及課では、引き続き農福連携の取組みについて、関係機関と連携して支援していく。



【トマトの仕分け・箱詰め作業の視察】

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■夏秋トマト 夏秋トマト3Sシステム（独立ポット耕栽培）生育調査

夏秋トマト3Sシステムは、従来の栽培方法に比較し、収穫期間の拡大による収量増、土壌病害の回避による安定生産を実現可能である。農業普及課では、システム導入者（高山市6戸）の栽培管理を支援するため、令和3年3月11日より生育調査を中山間農業研究所と連携して行っている。

調査項目は開花状況や葉柄汁中硝酸イオン濃度、排液のEC等としており、システム導入1～2年目の生産者は毎週、3年目以降の生産者は隔週で調査に基づく指導をしている。

8月は曇雨天が続き、給液量の調整がポイントになるが、どの生産者も黒球による日射比例方式の給液を使いこなし、順調な生育を確保している。今後、11月栽培終了まで生育調査を続け、適切な栽培管理へ繋げていく。



【果実の肥大状況を確認】

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■水稻 水稻採取ほ場で審査を実施

高山市丹生川町の約24haのほ場において、「たかやまもち」や「ひだはまれ」など5品種の採種事業を実施している。採種ほ場で生産された種子は、次年度に一般種子として生産者に供給されるため、厳格なほ場管理が求められている。

県主要農産物種子審査員に任命された農業普及課職員等により品種毎に出穂期審査を8月上旬から中旬にかけて実施した。今年は、中旬以降雨の日が多く、審査は大変であったが、ほ場ごとに生育状況を確認するとともに、異品種や変異株の有無、雑草や病害虫の発生状況について基準を満たしているか審査した。今後は、適期刈取指導等を実施し、次年度の種子が確実に確保できるよう指導を行っていく。



【1株1株確認しながら審査を実施】

■水稲 カントリーエレベーターの荷受け日程を決定

農業普及課では、8月2、10、17日の3回にわたりJAひだ吉城営農センターの担当者とともに営農センター管内のほ場を巡回し、水稲の出穂、登熟の状況を確認した。今年は平年より数日早く出穂が始まったものの、大雨が続き急激に気温が低下したため、穂揃いが悪く登熟に遅れが生じているほ場が目立った。このことから収穫適期は、平年から大きくずれることはないと判断し、各カントリーエレベーターではほぼ平年どおりの日程で荷受けを行うこととなった。

荷受けの日程は、担い手組織を参集し、8月19日に開催された営農組合代表者会議で公表された。農業普及課では、水稲の生育状況を説明するとともに、積算温度による収穫適期予測についての情報を提供し、適期収穫に向けた指導をおこなった。今後は担い手組織以外の生産者にも情報を周知し、適期に収穫が行われるよう指導を継続していく。



【JA担当者とのほ場巡回】

■ほうれんそう 産地内着荷調査で品質チェック

7月29日、ほうれんそう部会では産地内着荷調査が開催された。

これは部会役員と関係機関が、部会員が出荷したほうれんそうの状態を確認・審査し、その結果を各部会員へ報告することで出荷物の品質向上を図る取組である。

出荷されたものの多くがきれいに調整されていたが、一部で葉の腐りや葉先焼け等が散見された。農業普及課は品質向上に向け今後も支援を行っていく。



【チェックは厳しく】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■宿儺かぼちゃ 宿儺かぼちゃの圃場審査を実施

ヘチマのように細長い形が特徴的な地域のブランド野菜「宿儺かぼちゃ」が実りの時期を迎えている。

地域で古くから栽培されていたかぼちゃを選抜し、地域の農地を守っていくために「宿儺かぼちゃ」作りが始まった。生産者の数も次第に増えていき、今年は宿儺かぼちゃ研究会が設立されてから20年の節目の年である。

研究会では、栽培技術の向上、生産者同士の切磋琢磨のため、栽培管理の上手い生産者を表彰する圃場審査を実施しており、農業普及課は審査員として、圃場の管理、着花状況、病虫害対策の実施といった観点から審査を行い、良質なかぼちゃ生産のためには基本的な栽培管理が重要であることを伝えた。今後なかぼちゃが消費者の食卓に届くまで、栽培管理や防除指導を行っていく。



【圃場管理の
良し悪しを評価】

■飛驒メロン 第37回飛驒メロン共進会

第37回飛驒メロン共進会が開催され、生産者が丹精込めて育てあげたメロンの出来栄を競い合った。

メロン品質で大切なネット（網目模様）を綺麗に入れるには、温度・湿度のコントロールが重要であるが、今年は梅雨入りが5月中旬と早く、6月上中旬にかけては高温傾向が続き、栽培管理の腕が試される年となった。また、7月上旬は日照不足となり、糖度を上げるのにも苦戦したが、共進会には見事な玉揃いのメロンが出品された。

農林事務所は農協、市場関係者とともに審査を行い、出品されたメロンの評価を行った。どれも甲乙つけ難い出来栄であり審査は難航したが、見事最優秀賞を獲得した生産者には県知事賞が贈呈された。



【最優秀賞者の表彰】

■とうもろこし 吉城地区 とうもろこし部会で目揃え会を開催

8月10日、吉城地区とうもろこし部会で目揃え会が開催された。吉城地区とうもろこし部会は、現在14名の会員がおり、品種は「ゴールドラッシュ90」を栽培している。

当日は、農業普及課から今年の気象や収穫時期について情報提供を行い、その後JA担当者から出荷要領について確認を行った。

目揃え会では、生産者と意見交換を行いながら、出荷基準の確認を行った。

今年度は、気温が高く推移しているため、出荷は前進傾向にある。品質は、病害虫の発生は少なく、7月は天候も良かったため、質の良いものが揃っていた。

農業普及課では、適宜情報提供や巡回を行い、高品質なとうもろこし栽培が行えるよう支援していく。



【目揃えをする生産者】

■果樹 モモ「飛驒おとめ」改良一重袋現地調査

県が育成した「飛驒おとめ」は、主要品種の「白鳳」と「昭和蜜桃」の端境期に収穫可能な品種として、飛驒地域で普及している。また、「飛驒おとめ」は日焼け防止に行った袋の除袋作業が「白鳳」の収穫ピークと重なるため、除袋作業が不要な一重袋が一部で普及し始めている。

しかし、一重袋は二重袋と比較し、果点荒れ（あわ果）の発生が多く、外観品質では劣る欠点がある。

そこで、農業普及課では中山間農業研究所と連携し、あわ果の発生を抑えることができる改良一重袋を用い、現地試験を実施している。

8月10日、13日に調査を行い生育・着色状況やあわ果の発生状況を確認した。また、8月11日には収穫後の果実について、あわ果の発生数やその程度を調査した。生産者からは、改良一重袋の労力低減と外観品質の向上効果に期待しているとの声が聞かれた。

今後は今回の調査結果や、袋掛けのしやすさ等の使い勝手も含めた生産者への聞き取り調査の結果を踏まえ、関係機関や生産者と連携し、改良一重袋の普及性について検討していく。



【現地調査の様子】

■夏秋トマト J Aひだ営農指導員との連携強化

J Aひだ管内における夏秋トマト栽培技術支援を円滑に実施することを目的とし、営農指導員と普及指導員の連携会議を8月16日に高山営農センターで開催した。

この連携会議では、栽培のポイントとなる時期（年に数回）に各産地の状況を共有し、具体的な対策の明確化や技術統一を図るとともに、産地一円に提供する栽培管理情報の発行を行っている。

今回は、秋期の安定出荷にむけて病害対策や肥培管理の徹底を図ることや台風対策の徹底について協議を行い、飛騨蔬菜出荷組合トマト部会全員に情報が行き渡るよう栽培管理情報を発行する。



【病害対策について協議】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■夏秋トマト 着色促進効果を明確化する実証試験実施

夏秋トマト栽培では、秋季に雨よけハウスの開放部を被覆し保温することによってトマトの色づきを促進している。しかし、被覆により湿度が高まることで果実の結露が発生しやすくなり、果実の病害や汚れの発生による品質低下の原因となっている。

管内では、生産者団体（飛騨夏秋トマツスマート農業協議会）が「データ駆動型農業の実践体制づくり支援事業」を活用してこの課題解決に取り組んでおり、参加生産者のうち8戸がハウス内湿度を制御するための被覆用サイドビニルの自動巻き上げ機を導入する。

農業普及課では、この機器を適切に制御し、トマトの色づきが適切に促進されることを確認するため、農業者が果実を収穫する際に収穫日を記入していただく実証ハウスの花房に開花日を記載した札を設置した。



【開花日を記入した札を設置】

■花卉 飛騨菊目揃え会

7月29日に、J Aひだ管内で飛騨菊目揃え会が開催された。当日は、J Aの担当者から全国的に前進傾向で7月中旬までは入荷量が多かったが、下旬頃には梅雨が明けた地域も多く、気温が上がり出荷量が減少している点、また今後は盆に向けて出荷量も少しずつ増え、需要に合わせて値段も上昇するとの予測が示され、他産地の生育状況や販売情勢の情報提供がされた。農業普及課からは特に今年は発生が多いアブラムシ等の防除対策について説明した。その後、現物を持ち込み花芽の残し方等調整方法の実演が行われ、生産者は熱心に説明を聞いていた。

農業普及課では、J Aひだ営農指導員と連携し、飛騨菊の生産を支援していく。



【目揃え会風景】